

IV 研究内容

1 英語の学習意欲を高めるには

(1) 学習意欲とは

『学習指導用語事典』（2005）において学習意欲は、「学びたいとか、学ばなければならないというような気持ちのことである」と定義されている。意欲とは心理学では、動機づけと呼ばれる。一般に、学習意欲には、心理学的な見地から「内発的な学習意欲」と「外発的な学習意欲」が存在すると言われている。本研究のテーマである「学習意欲を高める」ためには、まず心理的な欲求や学習意欲の形成に影響を及ぼす動機づけについて理解する必要がある。

桜井（1997）は、「『内発的な学習意欲』は、自ら進んで学習に取り組み、学習自体を楽しんでいる意欲である。『外発的な学習意欲』は、学習の目標は学習それ自体ではないが、自己実現を図る手段として学習に対して自発的に取り組もうとする意欲である」と述べ、また、「学習意欲が育つプロセスとして、学ぶ意欲を支えているものは『自己有能感』『自己決定』『他者受容感』である。それが、『知的好奇心』や『達成』、『挑戦』という学習行動となって表れる。この学習の過程で成功を体験すると、認知・感情レベルにおいて『おもしろさ』『楽しさ』『充実感』が得られ、新たな学ぶ意欲へとつながる」としている。

また鹿毛（2007）は、「意欲が育っていくには、自らの個性が他者によって受け入れられ、自分の成長が周囲によって支えられるという気持ち、受容感を人とのかかわりの中で感じる必要がある」と述べ、「受容感」の存在について強調している。

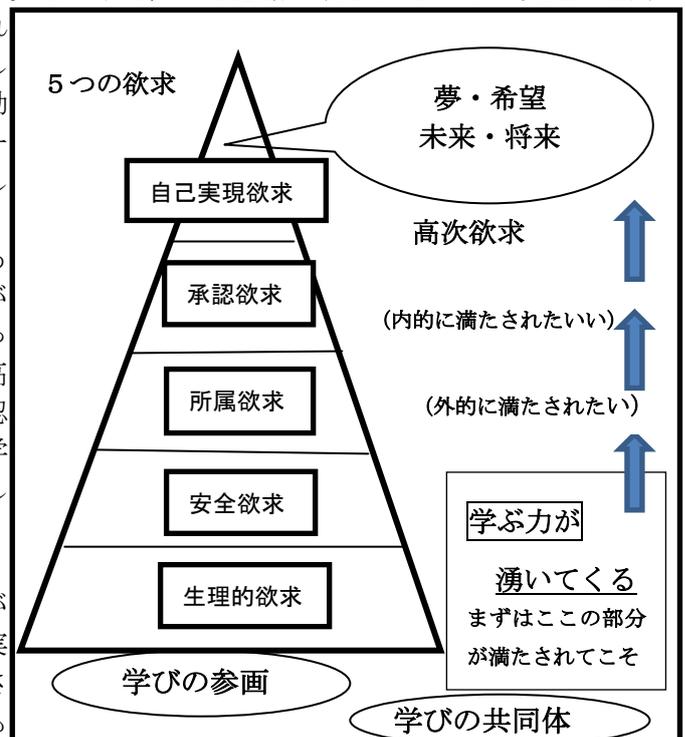
例えば、生活背景の中で、自尊感情が持たず、「どうせ自分なんか」と卑下する生徒がいる。養育発達課題がある生徒が教室には存在する。その中で、自尊感情が育まれていない状況が垣間見れる。その事を受け止めながら、それぞれの良さを引き出しながらどう授業づくりをしていくか考えていきたい。また学習意欲（動機づけ）については、アブラハム・マズロー

「欲求段階説」を参考に図1は筆者が作成した。「学ぶ意欲の形成」にとって重要な所属感・自己有能感について捉えることができる。右記のマズローの5つの欲求を踏まえながら、子ども一人ひとりに授業を通して関わっていく。まずは低次欲求を満たしてこそ高次欲求が期待できる。仲間に聴いてもらい認めもらう経験や関係性を構築しながら、学ぶ喜び、学級への所属感を高め教室を安心して学べる居場所にしていきたい。

胡子（2016）も同様に、「できた、役に立っている」と実感させることで一番意欲が高まる。個々に役割を与え、自分の伸びを実感できる体験や言語活動を授業の中でたくさん行っていくことで、できたという実感をもたせることができる。教師からのタイミングよく行われる適切なフィードバックにより、生徒はさらに得意なところを伸ばしていくようになる」と自己有能感を持たせることの意義を述べている。

さらに横山（2015）は、「内発的動機づけによる活動は、外発的動機づけによる活動よりも、子どもが楽しく感じ、活動の質が高くなり、活動が継続すると言われる。自己決定感や有能感がもたらされ、内発的動機づけによる行動は自発的・継続的になる。授業で子どもにとって必然がある課題解決の場を設定することで、学習意欲が高くなり、子どもが積極的に活躍する授業を展開する要因となる。内発的動機づけに繋がるような授業の工夫が必要とされる。」と述べている。

このことから学習意欲を支えている要素として「受容感」「自己有能感」「自己決定感」が重要だと考える。それらの要素を満たすような手立てを講じることで、学習意欲の形成を図りたい。



※ 図1 学ぶ意欲を育むための5つの欲求
(アブラハムマズローの欲求段階説を基に筆者作成)

(2) 学習意欲を高めるとは

John M. Keller (1983) は、学習意欲を「注意(Attention)」「関連性(Relevance)」「自信(Confidence)」「満足感(Satisfaction)」の4つの要因でとらえ、授業における学習者の学習意欲の分析や、学習意欲を高めるためのモデルを提唱した。これらの4要素の頭文字をとってARCSモデルという。これは従来の動機づけに関する様々な研究を統合したもので、授業や教材の魅力を高め、学習者の意欲を喚起するための工夫を支援するモデルである。学習意欲を4つの側面から分析し、その4つを体験させることで、学習を高め、モチベーションを維持できる効果があるというものである。図2は、学習意欲の4つの側面を図式化したものである。

横山 (2015) は、「学習意欲を持続させ高く保つには、子どもの努力が報われるような配慮が必要で、教師が見届けてきちんと評価したり、子ども同士がお互いに認め合ったりするといったことが大切である」と述べている。ARCSモデルは、動機付けを高める導入での工夫のみではなく、学習過程全体に対しても工夫が可能であるといえる。授業者は、学習意欲を高める指導(授業)ができていないか確認することができる。したがって、筆者は、動機づけについての方法論と捉え、能動的に学習に取り組む自立した学習者を育てることを目指し、ARCSモデルを活用したい。

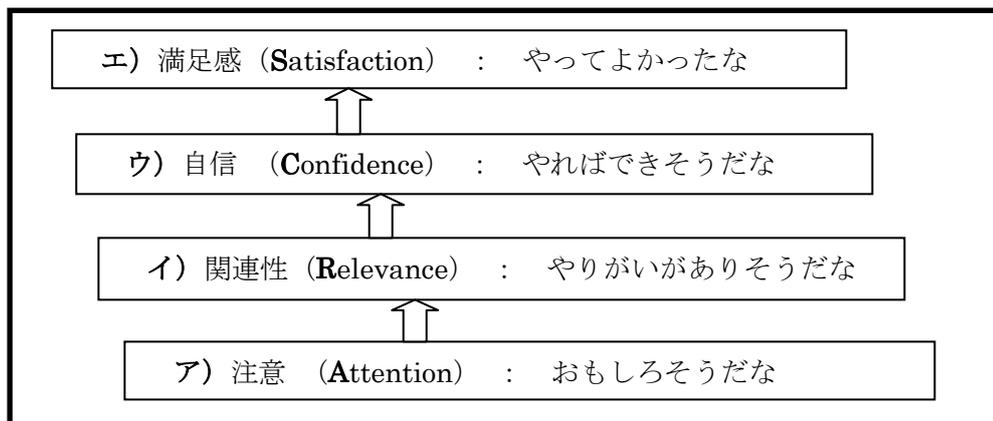


図2 ARCSモデルの4つの要因(鈴木, 1995を基に筆者作成)

表1 ARCSモデル 学習意欲の4つの側面

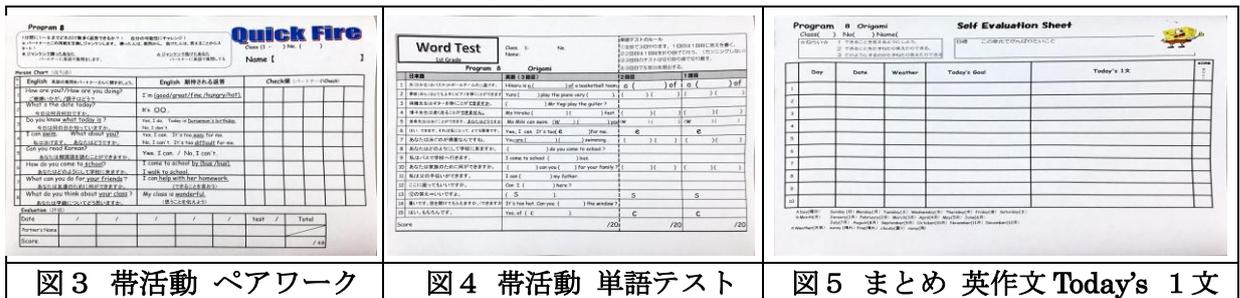
<p>ア) 子供は、授業の導入で不思議なことや変わった事象を提示されると「おもしろそうだな」と感じる。これが「注意」の側面で、「不思議だなあ、調べてみよう」と主体的に調べようとしていたり、目新しいことを自分でやってみようと思ったりしている興味・関心の高い状態である。「注意」の側面が満たされると、すぐにでも学びに入ることができる。</p> <p>イ) 学習課題がわかり、これからやることが自分の疑問を解決することであり、自分にとっての意味や価値を理解すると、子供は「やりがいがありそうだな」と感じる。これが「関連性」の側面で、「関連性」の側面が満たされると、子供は積極的に課題解決に取り組むことができる。「何のためにやるのかははっきりしていて、はやく課題を解決したい」「自分の知っていることと関係がありそうだ」「班で協力してできそうだ」などといったことが、努力が報われそうだという子供の思いを強くし、「関連性」の側面を強化する。</p> <p>ウ) 課題解決の方法が理解でき、解決までの見通しがもてると、子供は「自分一人でできそうだな」「班で協力すればできそうだな」と感じる。これが「自信」の側面で、「やればなんとかできる」という成功への期待感を子供が持っていることが重要である。「うまくいった」という成功の体験を重ねることで、「自信」が高まっていく。</p> <p>エ) 課題を解決して、「疑問が解決できた」「できるようになった」「先生にほめてもらえた」「友だちが認めてくれた」と感じると、「やってよかったな」と思う。これが「満足感」の側面で、「満足感」の側面が満たされると次の学びへの学習意欲につながる。</p>
--

(3) 学習意欲を高める授業の工夫とは

全ての生徒が授業に参加し、授業に引きつけられ、意欲の高まりと共に生徒が「できるようになった」と実感できる。そんな魅力ある授業を提供したい。生徒が英語の授業が楽しいと思える授業にするためには、まずは動機づけが重要だと考える。学ぶことの楽しさは、仲間との学び合いの中で育まれていく。英語は強制的に勉強させるものではなく、なぜ英語を勉強するのか、英語を勉強することによってどのようなメリットがあるのか、英語が自分の将来にどのように生かされ、役に立つのかを生徒たちに語りかける必要がある。このように英語を学ぶ必要性について理解を促すことが重要である。その動機づけと目的を見据えた学びは、学習意欲の原動力となる。

そこで先述したマズローの欲求段階説や ARCS モデルを踏まえて授業を展開したい。授業の基盤となる支持的風土づくりで安全欲求と所属欲求を満たし、生徒の自尊感情を高めたい。温かく支え合い安心して学べる学習集団をつくることで、間違っても恥ずかしくない。むしろ間違ふことを楽しむことができる。そんな安心して自分（声）を出せる雰囲気をつくる。授業の始業時に英語の歌で英語学習の雰囲気をつくったり、導入においては、スモールトークやワールドトピックの時間を適時設け、生徒の言語や文化への興味・関心を刺激したり、また帯活動で対話文、Quick Fire (図3) 等でルーティン化し繰り返し取り進む中で、安心感とできる喜びを体感させ、自信をつけさせたい。可能な限り、パートナーと自己の考えや気持ちをお互いに伝え合う場面を設定する。展開においては、帯活動を発展させた活動で、生徒たちに主体的に思考させ意欲を促す言語活動の場面を設定する。言語活動から内容的な気付き、言語的な気付き、文法的な正確さも身につけさせたい。そのために、センテンスの中で単語や熟語習得ができる単語テスト (図4) を定期的実施し、基礎・基本を押さえさせたい。視覚教材や ICT 機器の効果的な活用、ALT やゲストティーチャー等の活用で、目標となるよいモデルを明確に示し、活動の目的と見通しとプラスのイメージを持たせる。まとめにおいては、毎時間授業の最後に書かせる英作文、Today's 1文 (図5) で、英文を書くことを習慣化することで抵抗をなくし、力をつけさせる。また、生徒のより良い活動や発言を取り上げ、賞賛し学級全体で共有する。授業の理解度を問う質問や印象に残っている活動やまた取り組みたい授業は、力がついた授業は、などの聞き取り調査を定期的に行い授業に反映させる。提出物や評価シート、ワークシートは丁寧に目を通し、単語や文法等に間違いがあれば訂正し、次時に生徒に返却し、フィードバックをする。また生徒の努力したことや仲間と共に協力して取り組んだことへのコメントやメッセージを書き、生徒との繋がりを大事にコミュニケーションを図る。

このように日々の関わりの中で、生徒理解に努め、個々の実態を把握し、授業づくりを創意工夫することで、生徒の学習意欲を喚起できると考える。



2 協同学習を基盤にした授業づくり

(1) 協同学習とは

① 協同学習の定義と5つの基本要素

Olsen & Kagan (1992) は、協同学習とは「グループ内で良い人間関係に基づく学習者の情報交換によって学習が成立し、また、各学習者が自分自身の学習に責任を持ち、仲間の学習を最大限に高めようとする学習」と定義している。大場 (2015) は「したがって、単なるペア学習やグループ学習が自動的に協同学習となるわけではなく、グループ内の学習者同士の人間関係を構築することによってお互いを信頼し、自分と仲間の学習に対して責任を持つためには、一定の条件を満たしたペア活動やグループ活動が必要となる。」と協同で学ぶ本質的な意義を述べている。協同学習の基本原理や理念については、米国のジョンソン兄弟や日本の佐藤学をはじめ、様々な学者が様々な表現でまとめているが、本研究においては、Johnson, Johnson & Holubec (2002) の提案する5つの基本要素を採用することとする。なぜなら、

Johnson, Johnson & Holubec の協同学習の基本理念は、英語の授業スタイルに応用しやすく、筆者が考えるべき協同学習にも合致、意味深い学びに繋がると考えるからである。授業者は、この5つの要素をどの活動のどのタイミングで取り組むことができるかを、意識し授業を展開することが重要である。Johnson, Johnson & Holubec は、協同学習を取り入れた授業を効果的にするために、以下の5つの基本的要素（表2）が不可欠だとしている。また、協同学習で学習の促進を目指すために特に下表2のイ「個人と集団の責任」とウ「促進的相互交流」を押さえておきたい。この2つは協同学習のほぼ全ての技法に重要であるということが強調されている。Slavin(1996) は、「学ぶ意味や理由を一人ひとりに真剣に考えさせておく必要がある。」と述べている。

表2 協同学習の5つの基本的要素

ア、肯定的相互依存（互恵的な協力関係）がある（positive interdependence）
協同学習において最も重要な要素である。グループの仲間は、自分たちが「浮き沈みを共にする（sink or swim）の関係にあることを知っていなければならない。グループの各メンバーは、自分たちが与えられた課題を学習することと、その課題に関して仲間全員の学びを確実にする責任が求められる。個人の成長はグループの成長と結びついており、グループが成長すると個人も成長する。グループの目標を達成するために、お互いを助け合い、尊重し合う必要がある。協同的に活動するためには、課題とグループの目標が明確でなければならない。
イ、グループの目標と個人の責任が明確である。（Individual and group accountability）
目標達成に対して個人およびグループにはその責任がある。すなわち、グループ全体としての成果が評価され、その結果が達成基準をクリアしたか否かの確認が個人に返されるとき、そこにはグループとしての責任が存在する。グループの各メンバーが、グループ活動の成功のために割り当てられた役割を認識し、確実にその責任を果たすことが求められる。役割は固定せず、輪番制などにして等しく責任を負い、さまざまなスキルを身につけさせることも重要である。協同学習グループの最終目的は、グループの各メンバーが強い個人として成長することである。
ウ、対面しての促進的（積極的）な相互交流がある（face-to-face promotive interaction）
課題遂行のためには、対面して、積極的に援助し合うことが求められる。グループの各メンバーがグループの目標を達成するために、お互いの努力を認め、励まし合うとき、また、問題の解法を教え合ったり、あるテーマについてディスカッションするとき、促進的な相互交流が起こる。
エ、小集団における対人的技法（スキル）を獲得し、使用する（interpersonal and small-group skills）
協同学習グループでは、生徒達は教科の内容の学習（タスクワーク）およびグループの一員として機能するために小集団における対人的技能（チームワーク）の獲得が求められる。つまり、学習課題とグループの仲間とうまく活動するために必要な対人関係技能（ソーシャル・スキル）やグループスキルを意識的に学ばなければならない。
オ、グループの改善の手続き（ふり返し）を行う（group processing）
協同的なグループが効果的になるためには、グループがいかにかうまく機能したか（あるいはしなかったか）を話し合う必要がある。つまり、（a）グループの仲間のどのような行動が役に立ち、あるいは役に立たなかったか、また、（b）どの行動を続け、どの行動を改善すべきか、を決めるためにグループでふり返ることが大切である。

大場浩正「英語授業における協同学習を取り入れた活動中学校英語WEBマガジン」を基に筆者作成(※1)

② グループ編成と座席の配置

ペア、グループの組み方については、江利川（2012）で根岸が紹介した方法がある。筆者は「クラス全体をペアリーダーとパートナーに分けて、人間関係を把握した上で教師がペアを作り、2つのペアを組み合わせて4人グループを作る方法」を採用したい。メンバーの構成は、生徒の成績や授業での様子、人間関係などを考慮し、生徒の意見も加味して教師主導で決める。男女混合の4人グループを作ることは前提で、前と隣は異性という配置にする。協同学習の5つの基本的要素のイが示すように、生徒の個々に役割を与え、一人ひとりの責任を明確にする。生徒は一人一人が主人公であるという考えを基本に、各グループにリ

リーダーを置くが、固定はせず、段階や状況をみて役割を替えるなど弾力的に編成し、様々なスキルを身につけさせる。全員に責任を果たさせる仕組みを作り、自分の役割（責任）を果たさせることで、自覚と「自分が仲間の役に立っている」という所属感を育むことができる。

また展開していく中で、役割や人間関係がうまく機能しない状況になった場合、リーダー会を開き、意見を聴き、情報を提供してもらおう。グループは、活動の様子を観察しながら、必要に応じて組み替えることも視野に入れる。

③ ハイレベルな教材やタスクの設定

江利川（2012）は「協同学習が成立しない要因のひとつは、教材やタスクが易しすぎることです。一人の力では到達できないような高いレベルの課題を設定し、目標設定のためのコミュニケーション力と、助け合いによる人間関係力を必要とするような課題設定が大切です」と述べている。そこで筆者は、学習課題を生徒の実態に即した学び合い学習が成立するような教材やタスクとなるように設定した。

(2) 協同学習を基盤にした授業とは

① 協同学習がもたらす効果

胡子（2016）は、「伝統的な生徒受け身で知識伝達インプット型授業から生徒同士の関わりを重視したインクッション型授業がアクテブラーニングの中でも求められている。英語授業では、協同学習による言語活動が英語力を伸ばすと同時に自己理解・他者理解・共感性・対人交渉力といった社会性にも寄与し、生徒の学び方が変わることで自立学習者へと育っていく。」と述べ、インプット型からインタラクティブ型への意識転換と協同学習がもたらす効果を述べている。さらに胡子は「この効果的な学び方について、体系的に示しているのが、national Training Laboratories のラーニングピラミッドだ。ラーニングピラミッドの元となったとされるのは、『経験の円錐』（Dale, Edgar. 1946）である。実証されたデータの裏付けの有無問題も諸説あるが、学習者が能動的になることで定着率が上がるのは理に適っていることからここに取り上げることにする。ラーニング・ピラミッドでは、学習定着率が次のように示されている。教えられたことよりも自ら体験したことの方が定着率がよく、さらに学んだことを他者に伝えることが最も効果的に定着を高めることになることが分かる。言語の学びは受動的なものでは自分のものにはなりづらいのだ。」と述べている。

私たち教師は、常に授業は誰のため何のために行うのかを自問自答しなければならない。私自身良かれと思って、先回り教え込んでしまうことで、生徒を受け身にし、生徒の思考や学ぶ機会を奪っていたのではないかと自省する。仲間同士で学び合う協同学習で、生徒が能動的に学べる方向づけをすることで、生徒は思考と学びを深めていく。自分1人では解決できない問題に出会った時、ペアやグループで協力して問題解決を目指す。そんな学習場面が協同学習である。協同して学び合う機会を通して、コミュニケーション能力を高め、信頼感や自信を獲得できる。協同学習で、学習の定着の促進と学習意欲を高めることが期待できる。

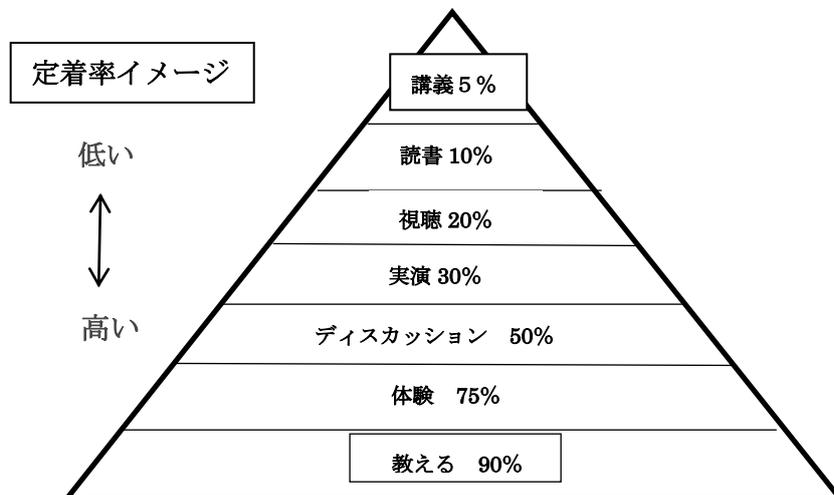


図6 ラーニングピラミッドで見る平均定着率（「経験の円錐」（Dale, Edgar. 1946）を基に筆者作成）

②協同学習を取り入れた学習場面 活用例

上述した Johnson, Johnson & Holubec (2002)の提案する5つの基本要素(表2)と関連付けながら、協同学習に関連する事例や筆者が取り組んできた実践等を踏まえ、活用例を以下のように整理し示す。

ア ペア学習 (主に導入で取り入れる)

活用場面	ある課題・質問について、まずは1人で考え、次にパートナーと話し合い、考えを共有する場面。
ねらい・効果	段階を経て徐々に大きなグループでクラスの前で話す意欲と自信を高めることができる。ウォーミングアップで有効。
技法名	シンク=ペアー=シェア Think-Pair=Share
協同学習の5つの基本要素	ア肯定的相互依存 ウ対面しての促進的相互交流

※barkley, E. F., Cross, K. P. & Major, CH; 安永悟監訳(2009)を参考に筆者作成

イ グループ学習 (主に展開で取り入れる)

活用場面	ある課題について、メンバーの一人一人が単語や熟語や短い言葉でキーワードを上げ、答えていく場面
ねらい・効果	全ての生徒が発言でき、多くのアイディアを作り出すことができる。グループ内の平等な参加が保証される。
技法名	ラウンド=ロビン Rround Robin ブレーンストーミング
協同学習の5つの基本要素	ウ対面しての促進的相互交流 エ対人的技法を獲得し使用

※barkley, E. F., Cross, K. P. & Major, CH; 安永悟監訳(2009)を参考に筆者作成

上記のことを踏まえて、協同学習を取り入れた授業をデザインし、授業を展開する。

(3) 協同学習を基盤にした授業展開

協同学習を基盤にした授業のねらいは、協同学習を意識的に取り入れた授業を展開していくことで、自己有用感を育み、学びに向かう力、英語への学習意欲を高めることである。まず上記の ARCS モデルが示しているように、学びに対して「おもしろそうだ」と興味、関心を抱かせることが出発点である。

江利川(2012)は「学習者のだれもが持っている聴き合い・学び合う力を引き出し、積極的に授業づくりに参画させることが必要なことなのです。習熟度によって子どもを輪切りにしてしまうのではなく、得意な子と苦手な子とが建設的に学び合い、支え合うことが全員を伸ばすことにつながるのです。」と述べている。学習形態としてペアやグループ活動を踏まえ学級全体へと展開させる。英語学習の目標として掲げられている「コミュニケーション能力の育成」をお互い聴き合う関係づくりを意識し地道に重ねる中で、目指したい。

実践の目安として、根岸(2013)は、「英語教育の効果(人格形成や学力形成)を最大限に高めるために、全体での授業とペア・グループの活動や学び合いを有効に組み合わせる授業を行う」を提起している。根岸は「教師が説明をしたりトレーニングをさせたりする一斉の部分と、ペアやグループ(4人程度)の活動や学び合いを組み合わせる教育の効果が高めると考えれば取り組みやすいであろう。」と述べられている。そのことから、筆者は現段階において、生徒の実態に即した一斉授業と協同学習を効果的に組み合わせる方法が有効だと捉える。以上のことを踏まえ、具体的な授業を下記のように展開する。

表3 具体的な協同学習を取り入れた授業展開例(学習内容に沿った学習形態)

流れ	学習内容	学習形態	留意点	本研究との関連した活動
帯活動	対話(QUICK FIRE) スモールトーク ワールドトピック Word Test 小テスト	ペアと 個→ペア(採点) 個→ペア→全体	・英語学習の雰囲気づくり ・動機付け ・帯活動でルーティン化	・マズローの安全欲求 ・ARCSモデルのアとイ ・5つの基本要素のアとイ
目標提	Today's Goal	全体(一斉で)	・しっかり聞かせる ・見通しと意欲を持たせる。	・ARCSモデルのイ ・5つの基本要素のア

示				
授 業 内 容	対話やQ&A等 問題や自己表現(作 文)歌 報告 発表 本文の読み取り	ペア&グループ グループ 個→グループ→ 全体	・辞書やホワイトボード等 の必要アイテムの準備 ・全員参加 ・モデルの提示	・マズローの所属欲求 ・ARCSモデルのアとイ ・5つの基本要素のアイウエ
ま と め	答の確認,説明, Today's一文 次時の学習と宿題の 提示	全体(一斉で)	・理解度のチェック ・生徒の良い発言を褒め, 全体で共有する。 ・次の学びに繋がる意識付	・マズローの承認欲求 ・ARCSモデルのウとエ ・5つの基本要素のオ

協同学習の理論研究を基に、協同学習の場面での課題や活動において、グループの編成方法、メンバー、座席配置の考慮、授業の振り返りで生徒の声を聴く等、個々やグループ、全体の学習効果を上げる工夫する。抽出生徒においては、2人の抽出生徒の実態と英語学習に対する考え方や行動面での変容を授業観察やアンケートやワークシート等で示す。学級全体においては、授業観察、アンケート、テストで生徒の意識変容を求める。協同学習が成立する要因、効果を高めるための留意点、生徒や授業者の役割での留意すべき点など、授業記録を分析し、協同学習を取り入れた授業の成果と課題を取りまとめる。

このように協同学習を基盤にした授業づくりを展開していくことで、生徒の英語への学習意欲が高まることを検証していく。

V 検証授業

第1学年 英語科学習指導案

平成30年1月16日(火) 6校時

1年3組男子16名女子17名 計33名

授業者 鈴木 博子

指導助言者 大城 賢

1 単元名 Sunshine 1 My Project ② (総合的な活動) 人を紹介しよう (開隆堂)

2 単元の目標

- ・既習事項であるbe動詞やcanを用いて、憧れや興味のある人物を英語で紹介できる。
- ・人を紹介する表現を参考に、自分の好きな人について、まとまりのある文章を書くことができる。
- ・聞いている人に分かりやすいように表情やジェスチャーを交えながら原稿を見ないで発表できる。

3 評価規準

単元	ア 関心・意欲・態度	イ 表現の能力	ウ 理解の能力	エ 言語や文化についての知識・理解
MP ②	①間違いを恐れずペアと協力して書いた原稿を積極的に発表している。【活動の観察】 ②聞き手が理解しやすいように工夫して話している。【活動の観察】 ③辞書を活用して書いている。【活動の観察】	①伝えたい内容を整理して、まとまりのある文章を書く。【記述分析】 ②言いたいことが相手に伝わるように工夫して話す。【活動の観察】	①大切な情報を正確に読み取り、概要を理解する。【記述分析】	①これまでに学習したいろいろな表現や知識を身につけている。【記述分析】 ②正しい語順や語法を用いて文を構成する知識を身につけている。【記述分析】

4 単元について

(1) 教材観

My Project はまさに創造的なTask活動であり、協同学習である。これまで学んで身につけてきた言語材料を振り返り、既習の単語や知識を総動員して活用する。その学習過程の中で新出語句も学ぶこととなり、言語材料の定着を図ることができ、4技能を育成することも対応できる教材である。本単元では、他者紹介文を作成し、相手に伝わるように話す工夫をすることを通して、話す意欲を高めることをねらいとする。話すことを主体にした自己表現活動をすることで、言語

材料に慣れ、定着を図り、その結果として生徒のコミュニケーション能力を身につけていく構造になっている。

(2) 生徒観

生徒は小学校の外国語活動で活動を通して「気づく」という学習に慣れ親しんできている。たとえば、「道案内」「買い物」「Who am I?」といった活動はすでに体験している。そこを踏まえて、発展させ、活動の意味付けや意欲的に取り組める内容の高まりを工夫したい。授業において生徒は、表情も明るく意欲的に学習に取り組む生徒が多いが、「書くこと」「話すこと」に苦手意識を抱き、アウトプットに課題があることが分かってきた。さらに英語学習に関する意識調査（2017年9月22日）によると「英語学習で一番身につけたい技能は」には「話すこと」が29%と一番多く、次に「書くこと」52%という結果が得られた。生徒が「書きたい」「話したい」という内容のあるタスクを与え、そこにたどり着く必要な情報や知識を活用し授業を組み立てていくこととする。授業の中で、役割を与え、自分の意欲や伸びを実感できるような体験や言語活動で個々が意欲的になれる場面を設定していきたい。

(3) 指導観

本単元では、第3者を紹介する文を作成する。生徒の実態に合わせ、他者紹介のスピーチ文から誰を紹介しているかを当てるクイズ形式の活動(Who is he /she?クイズ)にアレンジし取り組む。ペアからグループへと段階を経て、生徒たちに考えさせる活動の始めの場面を、Mind mapping (ラウンド＝ロビン)の技法を用いる。スピーチ原稿を仕上げていくプロセスの中で、生徒たちは自由にアイデアを出し合い、段階的に英文を書くことができる。英語が苦手な生徒も積極的に参加ができ、学習意欲を高める効果がある。ペアと協力して書いた原稿を積極的に発表する活動へと繋げ発展させる。伝えたい内容を整理して、正しい語順や語法を用いて文を構成することができることを目指したい。既習の学習事項を必然的に見直し活用することで、新出表現の定着も図りたい。

5 本研究との関連

研究テーマ	英語の学習意欲を高める授業の工夫 —協同学習を基盤とした授業づくりを通して—
研究仮説	協同学習を取り入れた学習場面において、生徒同士が学び合う授業づくりを工夫することで、自己有用感を感じ、英語を学ぶ意義や喜びを獲得し、英語への学習意欲が高まるであろう。

仮説を検証するため、協同学習を取り入れた学習場面を設定(表3)し、生徒同士が学び合う授業づくりの工夫をした。授業は協同学習の基本原則と導入法を取り入れ、(表2)全体で行う授業とペア・グループの活動や学び合いを有効に組み合わせる授業を行った。生徒は一緒に取り組む中で、ペアやグループの仲間のことを理解し、互いに気遣うことができるようになっていく。聴き合う関係づくりのために、学び合う関係づくりを意図的に仕組み授業をデザインした。一人での学習よりペアやグループといった協同学習が効果的であり、授業内でこの協同学習を意図的に取り入れることで、他者との関わりによって自分の学びとお互いの学びを最大限に高め、自己有用感を育み、結果として英語で表現しようとする力や「学習意欲」の育成にも影響を与えられることをイメージして授業を展開する。

6 単元の指導計画と評価(Sunshine 1 My Project ②)

	ねらい・活動	本課の評価規準との関連	評価の方法
1	○大切な情報を正確に読み取り概要を理解する。 (記述分析) ・これまでに学習した様々な表現や知識を身につけている ・難しい言葉を日本語で置き換える練習をする。	ウ① エ①	活動の観察 ワークシート
2	○伝えたい内容を整理して、まとまりのある文章を書く。 ・マッピング例を参考に、グループで協力して、与え	ア③ イ①	活動の観察 後日テスト

	<p>られた人物の構想をマッピング作成する。キーワードを各グループから自由に出させ全体で共有する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 作成した人物紹介カードで流れに沿って書く練習をする。 	エ②	
3	<p>○ペア・グループで考えた紹介したい人物をクイズ形式で伝えることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 特徴、職業、得意なもの・こと、その人物に対する気持ちなど多くの情報をマッピングで提示し活用している。 生徒の作品、人物紹介カード、表現リストや辞書を参考にグループで考えた人物の紹介文を伝えたい内容を整理して、まとまりのある文章で書く。 次時に向けて、誰がどこを紹介（出題）するか、読み上げる順番等、役割をペア・グループ内で決める。 2人1組で行う際のグループの回り方の説明を理解する。 ペア、グループで発表の練習をする。 	ア③ イ① エ①②	活動の観察 ワークシート 後日テスト
4 検証 授業	<p>○人物紹介クイズ&発表</p> <ul style="list-style-type: none"> 他者紹介文のキーワードをヒントに暗記して紹介し（出題）できるようグループで協力して取り組む。（練習 10 分） グループ同士で人物当てクイズ大会（10 分） グループ内を廻り、紹介文を読み上げ、お互いにクイズを出し合う。（2回戦：前半5分、後半5分） 「即興でできる人？」と呼びかけ、クイズの出題者になってもらい、全体でも共有する。 発表の仕方と評価の方法を理解する。 聞き手の生徒は評価表を記入し、活動の中で気づいたこと発表者へのコメントを書く。 	ア① ②	活動の観察 ワークシート 評価表 後日テスト
5	<p>○スピーチ（自己評価 相互評価）</p> <ul style="list-style-type: none"> 評価項目と評価規準を確認する。 発表する際の注意事項を話す。(eye-contact, facial expressions, Gesture, 絵や写真, 小道具など) 各グループから1人代表で、スピーチを行う。 *残りの生徒は、一日2人ずつ帯活動で行っていく。 	ア ① ② イ ② エ ① ②	評価用紙 活動の観察
6	<p>本単元のまとめ（相互評価）&テスト</p> <p>○相互評価 ・撮ったビデオで相互評価、ベスト3を選ぶ。</p> <p>○テスト ・ALTを紹介する文を書く</p>	イ ① エ ①②	評価用紙 テスト 活動の観察

7 本時の指導 「紹介文を通して伝えたいことを相手に伝わるように工夫して話す」（4/6時間）

(1) ねらい

前時で作成した人物紹介マッピングのキーワードを活用し、ペアで協力して原稿を見ずに人物紹介をクイズ形式で楽しく発表することができる。グループで協力して作成した原稿で、ペアと共に何度も練習することで、積極的に発表する活動へと繋げることができる。

(2) 本時の評価

これまでに学習したいろいろな表現で、グループメンバーと協力して人物紹介を行う事が出来る。第三者について聞いて理解したり、オリジナルの文を作成したり話したりすることができる。また発表される英語を聞いて適切に理解し単語やフレーズを書きとることができ、原稿を見ないで、必要な情報を加えたりしながら、アイコンタクト、声の大きさ、話すスピードなどに注意しながら話すことができる。 【評価方法：活動の様子、発表内容とワークシート】

(3) 本時の授業仮説

授業形態を一斉、ペアからグループ（協同学習）へと段階を経て、生徒たちに考えさせる場面

を Mind mapping の手法も用い取り組む。生徒たちは自由にアイデアを出し合う活動から始まるため、英語が苦手な生徒もスモールステップで段階的に気軽に取り組むことができ、積極的に参加ができる。また発表の場面を全体ではなく、各グループ内で行うというようにハードルを少し下げ、かつ全員が発言者になれるような場面を設定した。そうすることで、間違いを恐れず発表に取り組むことができ、学習意欲を高めることができるであろうと考えた。

(4) 本時の展開

過程	指導過程 (活動・発問等)	生徒の学習活動	留意点や工夫
導入 10分	<p>1 Greeting Day/Date/Weather</p> <p>2 Words & Phases & Sentences (図7)</p> <p>3 Warm-up 既習事項の確認 Game : Who is he/she ?</p> <p>ある人物について英語で表現しヒントを出していく。次の活動に繋がることを意識した英文を取り入れる。</p> <p>① 安室奈美恵さん (図8)</p> <p>4 Today's Goal 目標提示 「パートナーと協力してキーワードで人物を紹介しよう。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・黙想後、始業のあいさつ ・日付けなどを英語で答える。 ・素早く英語で答える。 ・自己表現活動 <p>出来るだけ英語を使い、提示された人物を相手に伝える。</p> <p>①パートナーと (横&斜め) 回答者：男子&女子</p> <p>②グループの1人が回答者 その他3人が出題者</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目標確認する。 ・evaluation sheet へ記入 	<ul style="list-style-type: none"> ・始業のけじめ ・英語学習への切り替え ・楽しい雰囲気づくり ・ペアで協力して取り組む ・どう表現したかを生徒に尋ね共有する。 ・職業、性格など色々な情報が出る声かけをする。 <p>① ペアワーク (協力)</p> <p>② グループワーク (協力)</p> <p>(5つの基本要素のアとイ)</p> <p>(5つの基本要素のア)</p>
展開 30分	<p>1 ALT (ハーリー先生) によるモデルプレゼンテーション 他者紹介 Who is he/she? クイズ</p> <p>①デルスピーチの良いと思った点、気づいた点は?</p> <p>②デルスピーチから積極的に取り入れたいことは?</p> <p>2協同学習の導入 (グループ)</p> <p>① 前時でグループで作成した他者紹介文 (図8, 9) のキーワードをヒントに暗記して紹介できる (出題) よう、グループで協力して取り組む。 練習 (10分)</p> <p>*グループ内でリハーサル 良い所や改善点をメンバーからコメントしてもらおう。</p> <p>② 人物紹介 (10分) グループ内を廻り、紹介文を読み上げ、お互いに紹介し合い、その人物が誰なのかをやり取りの中で推測する。 (前半5分, 後半5分)</p> <p>③ 上手にできていたペアにクイズの出題者になってもらい、みんなの前でプレゼン</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・モデル：ALT の先生のプレゼンテーションを注意深く聴く。 ・モデルスピーチを聞いて、良いと思った点、気づいた点をメモする。 <p>① デルスピーチを聞いて、良いと思った点をペアで話し合う。</p> <p>② スピーチをする際に、モデルスピーチから積極的に取り入れたいことを話し合う。</p> <p>1 モデル ALT の発表を参考にしてグループで練習する。 ・読み練習をしたら☆を塗る。 ・グループの中でリハーサルをしたら、良かったところ、直した方がよいところについてコメントをもらう。</p> <p>2 プレゼンテーションの評価ポイントを意識して行う。 ・できたら英語で質問をして答えを導き出せるようにトライする。</p> <p>3 教師が指名したペアは、みんなの前で発表する。 ・アイコンタクト ・表情・ジェスチャー ・適切な語彙や文法を使用</p>	<p>別紙① 共有シート</p> <ul style="list-style-type: none"> ・内容、声の大きさ、ジェスチャー、姿勢、表情、アイコンタクト、発音など確認させる <p>①ペアワーク (協力) すばやく行う (30秒)</p> <p>②グループワーク (協力) すばやく行う (30秒)</p> <p>別紙② 原稿シート</p> <p>① グループワーク (協力)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループ内の一人一人が自分の役割を確実に果たすよう促す。 <p>・進行係・計時係 ・賞賛係・観察 (記録) 係</p> <p>(5つの基本要素のイ)</p> <p>別紙③ 評価シート</p> <p>① ペアワーク (協力)</p> <p>評価の観点</p> <p>①態度②表現③音声</p> <p>① 原稿を見ずアイコンタクト、表情を加え話す。</p> <p>② 伝わる内容、適切な語彙や文法を使用し話す</p> <p>③ 発音・適切な声の大きさ</p>

	テーションしてもらい、全体でも共有する。	・適切な声の大きさ・スピード	さ、スピードで話す。 (5つの基本要素の アとイとウとエ)
まとめ 10分	1. Today's 1文 「あなたの大切な人の特徴や性格を書こう」 2. Homework (表現リストの写本) 3. Question Sheet 4. Test の告知 ALT を紹介する文を書く問題	1. evaluation sheet へ記入し 授業終了後に提出 2. 表現リストの写本 3. 必要な人は取りに来る。 4. ハーリー先生に関する基礎情報を集め、テストに備える。	1. ねらいの達成度、 個々の到達度を確認 2. 下位の生徒も取り組みやすい問題。チェックし返却 3. 質問カードの意義を伝え活用するよう促す。 4. テストや学習へのモチベーションを高める。 (5つの基本要素のオ)

(5) 評価【評価方法：発表内容、ワークシート、活動の様子、後日テスト（文章数の変容）】

グループで作成したオリジナルの紹介文を原稿を見ないで目の前の相手とアイコンタクトしながら、適切な内容と相手に伝わる声の大きさ、スピードで話すことができる。また発表される英語を聞いて、適切に理解し単語やフレーズを書きとることができる。

図7 単語&フレーズ	図8 マッピング例 (生徒作品)	図9 マッピンググループ作品

8 検証授業研究

(1) 授業者の反省

子どもたち同士が学び合う姿が常にあり、協同学習の効果がすごく出てきている。抽出生徒を含めての個々の伸びが顕著である。予習・復習、提出物の状況もよく、生徒が生徒を褒める場面が増えてきている。また「もっとやりたい」「Let me try.」と自ら挙手し、発言や発表を求める声、「もう、終わりなの。英語の時間は終わるのが早く感じる。」「先生、〇〇君よく頑張っているからグループワークの時、見に来てあげてね。」等のプラスの発言や相手を思う気持ちを自由に出せる雰囲気と表現力も増してきたように感じる。それが何より嬉しく思う。それらの生徒の言動から生徒の仲間に寄せる優しさや伸びを感じることができる。

これまでの私の授業スタイルは教え込む要素が強かったが、協同学習を始めてからは、生徒は、課題や分からないことに対し、自分で調べたり、グループメンバーに訊いたりする力をつけてきている。勉強から学習へと移行してきていることを実感している。今日の授業の課題は、授業者の単元計画の甘さや対応のまずさから余裕のない授業展開となり、生徒に無理をさせた。時間配分を上手に出来ず、肝心なまとめが出来なかった。今日学んだことを全体で共有し深める時間を持つべきだった。毎授業の最後にはしっかりと振り返りを行うことが本時のねらいを定着させ、次時につなぐ大事な時間だと認識しながらも、今日はそれが出来なかったことは、深く反省し改善すべき点である。そこを踏まえて明日からの授業、次へのステップへと繋げていきたい。

(2) 意見及び感想

生徒が授業に取り組む姿を「笑顔があり、生き生きとしていて、楽しそう」「生徒同士褒め合っ

たり、サポートし合ったり、男女の垣根がなく学び合う授業が成立している」「学級経営がベースにあつての協同学習は、この研究はこのクラスに合っていると感じた」「全員が意欲的で、課題に取り組む様子を見て、個の意欲だけでなく、集団としての高まりを感じた」「単に教科のスキルだけでなく、学ぶ土台を築いているので、きっと他教科にもいい効果を及ぼしていると思う」「クラス全体の熱量が平均化され最後まで生徒の熱量がキープされていた」「全体的に学習からぶれない」「沖縄の課題はペアやグループ学習がなかなか成立しないといわれているが、今日の授業は、テーマを実現させる研究に繋がった」とたくさんの言葉をいただいた。

質問や課題としては、「ペアでの活動はよく見えて機能していると感じたが、グループでの役割や活動が見えづらかった」「板書の仕方や工夫はどうしていますか。生徒の発言や良さを引き出し、まとめて全体で共有してもよいのでは」との意見をいただいた。また、課題と要望として、既習事項を活用して文法的にも出来ている英文や発言は、全体で取り上げて、確認することや賞賛する場面があれば、もっとよかった」「シナリオ通りに行かないイレギュラーにどう対応するか。メリハリがない。枠をはめて教えること。発言も多く盛り上がったが、肝心の発言する事が苦手な生徒をどう引っ張っていくかがこの研究の大きなポイントだ」「英語の授業なので、英語で終わるべき。時間配分が出来ず、時間が超過した事は残念だったと思う。」との指摘もあった。

(3) 指導助言 (琉球大学教育学部教授大城賢氏)

良い点は、「学ぶ集団がもうできつつある。学級がリラックスでき安心して学べる場でないとはコミニカティブな授業は難しい。そういう支持的風土の上に人との関わりを作っていく英語の授業は成立する。学級づくり・雰囲気作りとコミュニケーション型の授業は表裏一体である。その要素がこの学ぶ学級集団には備わっており、すばらしいと感じている。お互い聴き合い、伝え合い、学び合う学習が成立していると感じた。今日の授業は、笑顔いっぱい表情と共に様々な学びが見られた。笑顔は人をさらに笑顔にするということ、人の温かさ、英語を使う楽しさ、伝えることの難しさ、人とかわる心地よさ等を今日の授業を通し、学び再確認した。また、人として言葉に気持ちを込める大切さ等、他者紹介をするというメイン活動の中で、授業自体がそのような仕掛けになっていた。本来言葉が持っている要素・言葉の学習としての伝える英語の授業という形になっていた。相手に気持ちを伝える、伝わったという経験をする授業を積み重ねていくことで生徒は、英語を使うようになり、好きになっていく。これからの生徒の伸びが楽しみだ。」との言葉をいただいた。

課題としては、ALT のモデルプレゼンテーションは、1回の実施だったが、2回話してもらった方がよかった。そうすることで生徒の思考力が活性化され深い理解につながると思う。1つのことが聞き取れると関連付けて推測できるので、他の言葉やキーワードが次々と分かっていく。それを経験させるには、2回聞かせることが重要で必要だった。また、生徒らが作った文の中に They is～. と文法的なミスがあった。それをどこで気づくか、指摘できるか、そこが言語的で深い学びの部分である。新学習指導要領では、言語活動を通して、内容的な気付きへと移行していくことで学びが深まるとされている。文法的な正確さを身に付けていくことになるので、学びあいが深まってくる。そうすると英語を本当に自分たちで学んでいく学びの集団に育っていく。それを期待しています。」との指導助言をいただいた。

VI 仮説の検証

本研究では、テーマを「英語の学習意欲を高める授業の工夫」として、「協同学習」を基盤とした授業を展開してきた。授業は、協同学習の基本原則と導入法を取り入れ、仮説に基づいて研究を行ってきた。協同学習を取り入れた授業を通して「学習意欲」を高めることができたかを、授業実践、生徒観察、ワークシートや自己評価の記述、他己紹介文(文章数の変化や内容)、アンケート調査結果から検証を行う。

仮説：協同学習を取り入れた学習場面において、生徒同士が学び合う授業づくりを工夫することで、自己有用感を感じ、英語を学ぶ意義や喜びを獲得し、英語の学習意欲が高まるであろう。

1 協同学習を基盤にした授業展開の検証

(1) 協同学習を取り入れた学習場面において

①授業の様子・生徒観察から見る意識の変容(全体)

グループで決めた紹介したい人物について、英語で紹介文を作成し、相手に伝えるという話す活動に重きをおいた授業を展開した。単なる情報を伝達しやり取りをする事にとどまらず、そこにその人に対する思いや気持ちを込めて伝えるという課題を設定した。最初にうちは、言いたい事をなかなか英語に変換できずに苦戦しているグループが多かった。難しい単語を分かりやすくシンプルな単語や表現に置き換える作業をグループメンバーで意見を交換しながら意欲的に取り組む姿が見られた。例えば「性格は天然ってなんて言うのかな?」「純粹でいいのかな?」「いいじゃん」とやり取りをしながら「pure」を引き出していた。「もっと付け加えよう」と余念がない。その後、自分たちで作成した紹介文を声を合わせて大きな声で読み上げて練習したり、覚えるためにジェスチャーを取り入れたり、アドリブで紹介文を作ってみたりと、教師の予想を超えた広がりのある展開となった。これまで、ペアやグループ協同で課題をこなすという学習活動をあまりしてこなかった。協同学習がこんなにも生徒を生き生きと意欲的にするとは、その様子は、取り組む前の予想をはるかに超えるものとなった。生徒の笑顔が増え、楽しく英語を使う様子が見られるようになったことは、本研究の大きな収穫であり、変容であると捉えている。学級全体が授業に参加し、学習への意欲の高まりを感じることができた。

②授業の様子・生徒観察から見る意識の変容（2人の抽出生徒の変容）

抽出生徒Aは、これまで、英語の授業に対して、意欲を示すことはあまりなく、授業中は体を動かすことが多く、姿勢も悪く、集中力がすぐに切れ歩き回っていた。書くことを極端に嫌い、配布されたワークシートも綴ることもなく、散乱させていた。筆者は、注意喚起をするため、座席は前列に配置し、意図的に筆者のお手伝い係、配布係にするなど配慮した。本人は、「英語はレベルが高すぎて授業について行けない。全然分からない。」と話す。好きなことをやっている時は、時間を忘れてしまうほど集中することができる。素直で教師側の注意に反抗することはないが、学習が定着すること、支援をすることも難しい状況だった。そんなA君が課題に前向きに取り組む発表の数も増えていった。あれだけ遠ざけていた「書く」課題もこなせるようになってきている。「英語の授業では、動いたり、友達と話すことができるからおもしろい」「先生、今日発表の時間ある? 当ててよー。なんか英語が好きになってきている。最近、英語の時間が短く感じる」という前向きな言葉が聞かれ、また、聴く態度が出来ていない生徒を注意し、たしなめる場面も見られるようになった。意欲が出てきたと同時に学習態度も落ち着いてきた。A君から発せられる言葉や行動から学習に対しての意欲と伸びを感じる。

抽出生徒Bは、学習に課題があり、特に英語学習に対して強い苦手意識と劣等感を抱いていた。「頭悪いから、どうせできないし」と発するB君の淋し気な表情に胸が痛む思いだった。授業中、手遊びが頻繁にあり、常にどこか上の空で幼さが残っていた。筆者の見立てによると、言葉による理解や空間認知が弱く、指示が通りにくい。「得意な教科は、理科で、特に実験が大好き」と語っていた。夏休みは、筆者と補習授業に取り組み、得意な教科を伸ばしながら苦手な教科へ向かうアプローチをしてきた。A君同様、これまでに見せなかった生き生きとした表情、ニコニコと楽しそうにグループメンバーと共に課題に向かう姿は周りにもいい影響を与えている。温かくサポートしてくれるペアやグループメンバーとの良好な関係が功を奏し、「僕は、グループに恵まれた」と話している。パートナーの生徒も「先生、B君さー、最近、自分から教科書や辞書を開いたり、書く字も丁寧に筆圧も強くなってきているよ。きっと自信がついてきたからだね。なんか嬉しい」と話している。また、検証授業の際の手を挙げての発言、検証授業後のペアでのプレゼンテーションでは、自らパートナーに「発表しよう」と声をかけ、一緒に学級全体の前で発表することを促していた。その後堂々とパートナーと共に発表することができた。クラスメートからの大きな温かい賞賛の拍手をもらい、B君は自信に満ちた誇らしげな表情を浮かべていた。B君もまた、パートナーやグループメンバーの関わりが変容の要因だと言える。「自分のことを受け入れ、話を聴いてくれる相手がいる」と言うことがB君にとって大きな励みであり、学習への動機づけになっている。

(2) アンケートやテストから見る意識の変容（全体と抽出生徒）

①意識調査アンケート

研究仮説が有効であるか検証すべく、検証授業前と検証授業後に実施した。対象生徒は検証クラス32名である。このように協同学習を取り入れた授業を行うことで全体と2人の抽出生徒の事前事後の英語学習への意識は、アンケート結果(表4)となった。

表4 英語学習に関する意識調査 事前事後アンケートの結果

Q 1 英語は好きですか。	9月実施	1月実施	
とても好き	6%	19%	抽出生徒A 9月「好きではない」 1月「好きな方」 抽出生徒B 9月「好きでも嫌いでもない」 1月「好きな方」
好きな方	29%	53%	
好きでも嫌いでもない	39%	19%	
あまり好きではない	13%	10%	
好きではない	13%	0%	
Q 2 英語の授業は分かりやすいですか。	9月実施	1月実施	
とても分かりやすい	10%	29%	抽出生徒A 9月「分からない」 1月「分かりやすい方」 抽出生徒B 9月「どちらとも言えない」 1月「分かりやすい方」
分かりやすいほう	52%	61%	
どちらともいえない	29%	10%	
分かりにくい	3%	0%	
分からない	6%	0%	
Q 3 授業の内容はどのくらい分かりますか。	9月実施	1月実施	
80%~100%	16%	29%	抽出生徒A 9月「0~20%」 1月「60~80%」 抽出生徒B 9月「0~20%」 1月「60~80%」
60%~80%	29%	39%	
40%~60%	32%	26%	
20%~40%	13%	6%	
0%~20%	10%	0%	

検証後に実施した「Q 1 英語は好きですか」の質問に「とても好き」「好きな方」と合わせて生徒の90%が「好き」と答えている。同様に「Q 2 英語の授業は分かりやすいですか」に対して「とても分かりやすい」「分かりやすい方」と合わせて生徒の90%が「分かりやすい」と答え肯定的な結果が得られた。また抽出生徒A・Bにおいても、検証前の「Q 1 英語は好きではない」から検証後「Q 1 好きな方」、検証前の「Q 2 英語の授業は分からない」から検証後「分かりやすい方」と答え、意識変容が顕著だった。その結果は、教師の授業づくりへの意識変容と生徒への関わり方、生徒同士の関わりに起因していると言える。

特に授業自体や書くことへの抵抗感や苦手意識がある抽出生徒においては、教師主導型で文法説明や単調なドリル等では、生徒の集中が続かず学びへ向かわせることは難しかった。協同で学ぶスタイルで、紹介文やスキット作成の創造的なタスク活動に仲間と共に取り組むことで、必要な知識を習得し、所属感、達成感が得られ、学ぶ意欲を培うことができたといえる。

②協同学習についてのアンケート

授業後、協同学習等の活動に関するアンケートを実施した。生徒対象は検証クラスの32名である。質問は以下の5つであり、5つの選択肢から1番自分の気持ちに近いものを選び(表5)さらにその理由を自由に書く記述式(表6)とした。

- Q1 協同学習を取り入れた授業は楽しい。
- Q2 本時の目標を達成した。
- Q3 ペアやグループで協力しあい、学び合えた。
- Q4 取り組んで良かった。(4人1組の協同学習について思うことを自由に書く)。
- Q5 英語の授業への意欲(やる気)や自信が高まった。

表5 協同学習についてのアンケート

	とてもそう思う	そう思う	どちらでもない	あまりそう思わない	全くそう思わない
	肯定的	(成果)		否定的(課題・	改善点)
Q1	17人	9人	3人	2人	1人
Q2	12人	10人	8人	2人	0人
Q3	21人	5人	5人	1人	0人
Q4	18人	9人	3人	2人	0人
Q5	20人	6人	5人	1人	0人

表6 自由記述の主な生徒の意見(一部抜粋)

	肯定的な回答 (成果)	否定的な回答 (課題・改善点)
Q1	・「協力し合っているな」って実感し、また英語が聞き取れて、少しだけグループ内で英語で質問したり答えたりできたので嬉しくて楽しかった。	・話し合いとかして、他の授業らしくない事をした。 ・英語が得意じゃないから、人任せになってしまったから楽しいと思えなかった。
Q2	・授業で習ったことや前日、グループで練習した英文が頭に残っていて、自然に出てきて表現できました。	・単語を暗記するのに必死で、時々原稿も見て紹介した。学習が深まったという所までは来ていない。
Q3	・一人一人やるべき事、仕事を与えると、しっかりやってくれてお互い教え合う場面も見れたので本当に良かったです。 ・聴き合ったり、話し合ったり協力することで、ペアと息があってきた。	・やりづらい時もあったし、いい時もあった。女子と合わないです。 ・私ばかりやっていて、皆で協力できなかった。グループメンバーをかえる必要があると感じたこともありました。
Q4	・1人でやるより、みんなでやったら仲間も深まるし、分からない所を聞いたり、教え合ったりして協力できる。	・グループ学習はいいけど、やる人とやらない人に分かれるから、やる人やできる人の負担になる部分もあると思います。
Q5	・やる気満々。これからも3組全員で英語力を高めていって頑張りたいです。 ・もっともっと英語が自分の考えた言葉で言えるようにしたい。	・英語は上手になりたいと思うけど、あまりやる気が湧いてこない。 ・英語は授業は、嫌いじゃないけど・・・得意じゃないし自信もない。

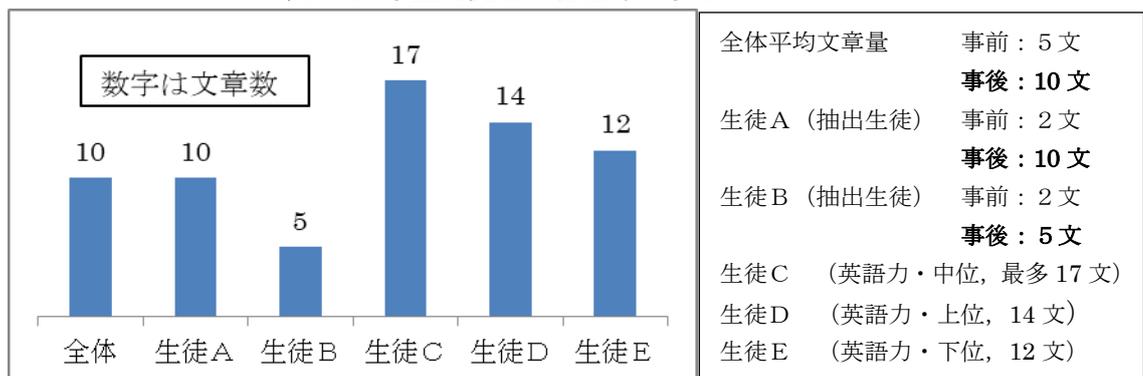
アンケート結果(表5)が示している通り、協働学習を取り入れた授業に対して、生徒は協同学習を受け入れ、好意的・肯定的に捉えていることが分かる。特にQ3やQ5の肯定的な回答が多数を占めたことは、協働学習がもたらすプラスの意義と影響があると言える。自由記述アンケート(表6)においても、英語への学習意欲や自己有用感の高まりを感じ取ることができ、協同学習の効果を示す記述が多かった。生徒はペアやグループで課題に取り組む中で、互いに聴き合い、学び合い、高め合えることを互いに学んでいく。仲間と共に課題に挑むことで得られる達成感、連帯感、安心感や自信を獲得している。それらが内発的動機付けや学習意欲の形成へとつながっていると考えられる。

さらに抽出生徒A「協同学習は良いと思う。他の人の意見を聴けるからおもしろい。自分じゃ考えきれない意見も考えられる。」とし、抽出生徒B「良かった。このグループで」と肯定的な回答とコメントを寄せている。だが課題を投げかけている改善するための貴重な少数意見や英語表現の得意でない生徒に対しては、真摯に向き合い手立てを講じる必要性を感じる。

②他者紹介文の文章数からみる意欲の変容

検証授業後「ALTの先生を家族に紹介する紹介文を作成する」というテスト(10分間)を実施した。全体と英語の基礎学力が上位・中位・下位の生徒と個(抽出生徒)の生徒5名の結果を文章数と内容で比較し考察を行った。以下のように個々の意欲の高まりを書く力で見ることができた。

表7 文章量で見える学習意欲の高まり



検証前では平均して5文程度であったが、検証後は10文と文章量が2倍に増加した。その要因として、身近な人を紹介する場面を設定したことで伝えたい相手を意識し、より多くの情

報を伝えるため、Mind Webbing を活用し、ALT が 4 月の自己紹介で話していたこと、前時に話していた内容を想起させ思考させる過程を踏んだことと、アンケート記述にあったように、協同学習でペアやグループ活動を取り入れた学び合いで、英語での表現方法を学習し広げ深めることができたことの成果だと言える。以前は 2 文しか書けなかった生徒 A 君（抽出生徒・10 文）、生徒 B 君（抽出生徒・5 文）の 2 人に関しては、以前は見られなかった最後まで諦めず集中して取り組む姿、文章数の増加からも意欲の高まりを感じる事が出来る。協同学習を始めてから発言・発表の回数が増え意欲が感じられる生徒 C さん（中位・17 文）は、文章数が最も多く、so（だから）などの接続詞も使うなど内容も充実していた。英語に関心が高く現在英検 4 級を取得し、3 級にチャレンジした生徒 D さん（上位・14 文）は、文法ミスがなく、can, like, be good at などの既習単語等を上手に使い、まとまりのある文を書いた。文を書くことが苦手な、学習意欲にも課題を抱えている E 君（下位・12 文）は、書いた文章に文法的な誤りはあるものの 10 分間集中して取り組み、最も変容が見られた。また、全体的に生徒は、ALT の先生に対し positive, smart 等のプラスの言葉や He is famous in our school. や so I respect him. など気持ちを込めた。

テスト後、ALT と共に原稿をチェックした際、「予想以上によく書けている」と褒めてくれ、さらに「自分のことを肯定的に捉えた素敵な言葉がたくさん並んでいて嬉しい」と笑みを浮かべていた。

<p>生徒A（抽出生徒）</p>	<p>生徒B（抽出生徒）</p>	
<p>生徒D（上位・14文）</p>	<p>生徒E（下位・12文）</p>	<p>生徒C（中位・最多17文）</p>

図10 文章量で見る学習意欲の高まり

クラス全体が課題に根気よく取り組む力は、学習意欲に支えられ成り立つものだと考えることができる。このように、協同学習を基盤とした授業を行うことで、生徒の英語学習への意識は次のアンケート結果（表 8）のようになった。

協同学習を取り入れた学習場面において、生徒同士が学び合う授業づくりを工夫することで、自己有用感を英語を学ぶ意義や喜びを獲得し、英語への学習意欲が高まることを検証することができた。

表 8 学習意欲に関するアンケート

英語の授業への意欲(やる気)や自信が高まった	とてもそう思う	20 人
	そう思う	6 人
	どちらでもない	5 人
	あまりそう思わない	1 人
	全くそう思わない	0 人

2 検証授業

検証授業では、これまでに学習したいろいろな表現を駆使し、グループで作成した人物紹介マップのキーワードを活用し、ペアで協力して原稿を見ずに、人物紹介をクイズ形式で楽しく伝え合う活動を行った。また紹介する人物について情報伝達にとどまらず、そこに気持ちを込めること、即興で原稿にはない必要な情報を加えたり、互いに質問したり、答えたりする英語でのやりとりにも挑戦することを盛り込んだ（ジャンプ課題）。グループで協力して作成した原稿で、ペアと共に何度も練習することで、紹介文を通して伝えたいことを相手に伝わるように工夫して話す意欲を高めることをねらいとし、積極的に発表する活動へと繋げる表現活動を行った。

		
導入：ペアワーク	展開：グループワーク	まとめ：ペアでプレゼンテーション

授業形態を一斉、ペアからグループ（協同学習）へと段階を経て、生徒たちに考えさせる場面を Mind mapping の手法も用い取り組んだ。生徒たちは自由にアイデアを出し合う活動から始まるため、英語が苦手な生徒もスモールステップで段階的に気軽に取り組むことができ、積極的に参加ができた。各グループ内で行うというようにハードルを少し下げ、かつ全員が発言者になれるような場面を設定した。そうすることで、間違いを恐れず発表に取り組むことができた。

本時の協同学習を取り入れた授業展開が学習意欲を高めることができたか。その有効性を検証するために、授業後にアンケートを実施した。以下のアンケート結果（表9）からも学級集団としての意欲の高まりが見て取れる。

「本時の目標は達成しましたか」「ペアやグループで協力し、学び合えましたか」の質問に対し、いずれも「とてもそう思う」「そう思う」の両方を合わせて、抽出生徒を含む32名中Q1は22名、Q2は26名が肯定的な回答をした。学習に対しての充実感、満足度が高かった。そのことは、協同学習の5つの基本的要素である「ア、肯定的相互依存（互恵的な協力関係）」と「ウ、促進的な相互交流」が培われ、その効果が得られた結果だと言える。

表 9 授業振り返りアンケート

Q1 本時の目標は達成しましたか。	人数	抽出生徒
とてもそう思う	12人	抽出生徒B
そう思う	10人	抽出生徒A
どちらでもない	8人	
あまりそう思わない	2人	
全くそう思わない	0人	
Q2 ペアやグループで協力し合い学び合えましたか。	人数	抽出生徒
とてもそう思う	21人	抽出生徒A・B
そう思う	5人	
どちらでもない	5人	
あまりそう思わない	1人	
全くそう思わない	0人	

3 検証のまとめ

江利川（2012）の「協同学習を取り入れた英語授業のすすめ」で学習意欲を高める活動の特徴をとらえ、協同学習の理念と導入法や実践例を参考にし、協同学習を基盤とした授業を展開することで、検証で述べたような生徒の変容がみられた。教室中に学ぶ楽しさを体感した生徒の笑顔と意欲があふ

れ、間違いを恐れず、意欲的にチャレンジする姿が見られた。聴き合い、学び合える学習が成立したことで、連帯感、達成感、満足感を得られたことで、自己有用感が生まれ、生徒の学習意欲を高めることができたと言える。協同学習を取り入れた学習場面において、生徒同士が学び合う授業づくりを工夫することで、自己有用感を感じ、英語を学ぶ意義や喜びを獲得し、英語への学習意欲が高まる（仮説）ことを検証することができた。

Ⅶ 研究の成果と課題

1 研究の成果

- 生徒は、「協同学習を取り入れた英語学習は効果的」という結果がアンケートから得られた。生徒は笑顔で生き生きと授業に参画し、主体的に学ぶ姿が見られるようになった。「ペアやグループで協力しあい、学び合えた」「協同学習を取り組んで良かった」「英語の授業への意欲(やる気)や自信が高まった」という3つの質問で、生徒の90%が「とてもそう思う」「そう思う」と答えている。協同学習を取り入れた授業が英語学習の学習意欲を喚起し、高めたと言える。
- 今回の実践の事後アンケートの結果から、英語力についても5割の生徒がその向上を実感できたとする記述が見られた。協同で同じ目標（与えられたタスク）に向かい学びを深めたことで、生徒が英語使用の必要性を感じたり、切磋琢磨して得られた英語の知識や表現方法や学び方を獲得できたことが英語の力をつけたという達成感と自信をもつことに繋がったと言える。
- 協同学習を取り入れる前には、英文を書くことへの抵抗が強く、単語さえ書くことも困難な生徒が自ら辞書を引いたり、分からないことをグループメンバーに尋ねることができるなど、仲間と共に学ぶ中で、気づきを得ることが出来るようになってきた。これらのことが紹介文や、やや長めの文章を書く力と知識、表現力の伸びに繋がっていると考えられる。これらは協同学習によって、周囲との関わり方を学び、小さな達成感を積み重ねることで、自己肯定感と学習意欲を育ててきた結果だと考察する。学習意欲の高まりは「書くこと」と「話すこと」の活動に表れていると言える。

2 今後の課題

- 少数意見ではあるが「怠ける人がいると、なかなか活動がスムーズに行かず困る」「人に頼り過ぎてしまう」「油断すると私語が増える」などの課題が指摘された。生徒の切実な声を受け止め、これらの対応策も必要である。またグループ間で、取組の個々の温度差や進度に差が生じたりするなど、活動が滞った時の支援方法を身につける必要がある。
- 今後、協同学習を取り入れた授業を充実させ英語力をつけるために、効果的に活動できるグループ編成や内容のあるタスクや教材をどうしたらよいか模索し、理論研究と共に授業実践を構築したい。
- 生徒同士が考えや意見を交流し共有できるような聴き方、発問の仕方を学び、言葉が交わりやすくなるよう環境を整え、生徒間でのやりとりを仕向け、生徒同士をつないでいく手立てを講じたい。
- 生徒の何気に発する意味のある「つぶやき」や素朴な「なぜ？」に寄り添えるゆとりを持ち、生徒の気づきを促す活動を取り入れ、その気づきをクラス全体のものにしていく手立てを身につける。

<参考文献>

- 胡子美由紀(2016) 『英語で行う英語授業のルール&活動アイデア』
- 生田孝至(2015) 『教材開発の基礎としてのインストラクショナルデザイン』 岐阜女子大学
- 大場浩正(2015) 『協同学習に基づく英語コミュニケーション活動が英語学習意欲や態度に及ぼす影響: テキストマイニングによる分析 上越教育大学研究紀要』 第34巻, 177-186
- E. F. Barkley, K. P. Cross & C. H. Major 原著者・安永悟監訳(2015) 『協同学習の技法』 ナカニシヤ出版
- 田尻悟郎(2014) 『田尻悟郎の英語教科書本文活用術』 教育出版株式会社
- 江利川春雄(2013) 『協同学習を取り入れた英語授業のすすめ』 大修館書店
- 田中武夫・田中知聡(2003) 『自己表現活動を取り入れた英語授業』 大修館書店
- 佐藤学(2012) 『学校見聞録 学びの協同実践』 小学館
- 杉江修治(2011) 『協働学習入門 基本の理解と51の工夫』 ナカニシヤ出版
- 桜井茂夫(1997) 『学習意欲の心理学—自ら学ぶ子どもを育てる』 誠信書房
- 沖縄県教育委員会 『わかる授業 Support Guide』
- 文部科学省 『中学校学習指導要領解説 外国語編』
- 沖縄県学力向上推進プロジェクト(平成29年度版)

<参考URL>

- (※1) http://www.kairyudo.co.jp/contents/05_kyoiku/sunshin_forum/06/index.htm - 中学校英語WEBマガジン